空

空
平成29年8月31日発行　第15巻4号　通巻第74号

2017・8

SORA 74号

糸田　宮井知英

一枚の植田が家に囲まるる
眠られぬ枕辺に来る青葉木菟
色紙を剥ぐごと麦の刈られけり
柚の花や家の偶ずみまで匂ふ
うたかたのやうに目高の生まれけり

北九州　横田敬子

開拓の地に祖の墓や夏つばめ
開作の畦を通りて山車行けり
魚市場駐車場とし浦祭
隣村の子も駆り出され山車を曳く
綱引くと御輿の鳥が羽根開く

福岡　田代貞香

子雀やよく日の当る父母の墓
春陰の深きに神の水の湧く
薔薇好きは薔薇を咲かせて疲れけり
向ひ合ふ人なき卓や白薔薇
逆縁の知らせ青水無月の朝

須恵　苑実耶

死せる蛇長き棒もて道の端へ
子の声の空突き抜くる夏隣
蹴上がりを教ふる兄や雲の峰
空蝉の上がり框に並べられ
ゴーグルの跡くつきりとプール出る

PDF= 俳誌の salon

直方　曽根富久恵

欄干に鴉の並ぶ春隣
川沿ひに似たやうな家鳥雲に
老猫に薬を与へ日永し
風薫る母の形見のバッグ提げ
飛行機の小さき窓や夏の月

長崎　松尾龍之介

落花あり駅の一番ホームまで
夕朧オニが屈んで毬となる
葉桜や矢羽根の廻る風向計
来たときと同じ貌して鳥帰る
実桜の粧を踏めば粧降る

春日　三井所美智子

毬となり眠れる猫や春彼岸
初夏の入日大きく海にあり
篝火に雨の降り出す花祭
読経つづきをり三門に花吹雪
美しきアーチの疏水風薫る

大阪　井上和子

教会の坂のはじめを花万朶
蒼海の朝にまぎるる新樹光
四阿の朽ちたる椅子や百千鳥
海光をまとふ藤房昼深し
真緑の鴉の卵夏兆す

PDF= 俳誌の salon

北海道　押田裕見子

頬刺の列を正して焼かれけり
食ひ初めの皿を食み出す桜鯛
三坪とて二人の糧の種を蒔く
ほろ酔ひのほのりほんのり花明り
紅椿息を殺して落ちにけり

大野城　森田明成

暮しぶりは和洋折衷更衣
黒南風やひげ剃り残す病み上り
己しか頼るものなし水中花
軒掠め夏草かすめローカル線
短夜や唱歌でをはる同窓会

北九州　河原敬子

夏座敷軸と座蒲団変へしのみ
葬終へてひたすら草を抜きにけり
活くるはずの桜桃食べてしまひけり
空豆の左右のカーブ愛すなり
庭ぢゆうが十薬の白雨もよひ

太宰府　西住三恵子

鵐尾と鵐尾つなぐ音あり余花の雨
老鶯のときどき混じる耶蘇の墓
白き花多き身ほとり夏来る
生返事ばかりの夫と夏帽子
懺悔室に女人のこゑや汗拭ふ

PDF= 俳誌の salon

東京　山田正子

十薬を干して長生きするつもり
花は葉に今老いて行く途中なり
寄せては返す波の形や夜光虫
青梅のことさら青き雨あがり
これほどに咲いていたかと柿落花

兵庫　青木朋子

赤子かと思ふ緋牡丹の三つ並ぶ
自転車の少年は風麦の秋
轍たどり行けば矢車草の家
近道の路地にどくだみ匂ひけり
青葉騒ひとり釣りする少年に

東京　遠山のり子

廃道の白む倒木蟻の列
苔の花人面石をとりかこみ
行く程にくねる山道夏落葉
青き香を放つ深山や合歓の花
どくだみの白に和める岨の径

福岡　樋口みのぶ

母の日や日記に話すごと記す
江戸つ子のごとく散りたる白牡丹
楊梅を兄が差し出す食べながら
初夏や傾げてつけるイヤリング
音読のいつしか途切れ夏休み

PDF= 俳誌の salon

宮崎　田代民子

鉦打つて今日のはじまる新茶かな
風五月上棟祭の吹き流し
葉ざくらや直会に酌む昼の酒
切株に浮きし年輪鳥の恋
松蟬鳴くこれより先は獣道

京都　天谷翔子

初燕天王山の風に乗り
塒もう整へたのか初燕
窓よぎる影いくたびも燕
岬への一本道やつばくらめ
立てば舟大きく傾ぐ夏燕

兵庫　岩井京子

妹と兄へ傘寿の五月かな
薫風や前ゆく兄の歩の確か
ビル風に煽られ日傘ちぎれさう
いちご盛るガラス器みどり熱の身に
香水のかほるや若き日の小箱

直方　吉田悦子

東北の被災地より熊本へ
亡き父の癖字に出会ふ彼岸かな
痛む膝いたはり眠る春時雨
山神の祠に塩を夏立てり
柩にもランクのありて走り梅雨
避難所に北より届く鯉のぼり

PDF= 俳誌の salon

神奈川　窪　みちこ

夏若葉青鷺一羽棲みつきぬ
青葦原鶴首のべて低く飛ぶ
風薫る古刹に千の招き猫
草匂ふ庭するすると青蜥蜴
鷗外忌英国帰りの娘の眩し

東京　今井康子

五線譜に誘ひのメモや夏兆す
夕焼や猫の駅長逆光に
天仰ぐ百合潮騒の断崖に
藁火激し言はるるままに鰹かざす
螢舟下りたるのちの螢かな

PDF= 俳誌の salon

空集抄——柴田佐知子抽出

父ははのなき世は長し金玉糖　高倉和子

夏期講習だまつて弁当食べてをり　吉田葎

千切れ飛ぶ鯛網漁の男唄　千波悠

ゆく先はゆき着くところ雛送る　角野良生

刈り倒す草がむにやむにや絮翔ばす　原友子

職なくも無頼にあらず豆の飯　田岡千章

海水を染めて渦巻く桜鯛　永淵惠子

きらきらと鯉のぼり手に帰る児ら　河原敬子

霧吹きて螢火匂ふ籠となり　中田みなみ

PDF= 俳誌の salon

一夜酒ゆつくり齢重ねたし　岸　洋子

牡丹のひらききつたるゆらぎかな　戸栗末廣

はらわたには億兆の菌星おぼろ　織田高暢

結界のごとくに水を打ちにけり　山本則男

実梅もぐ人ごと老いてゆく故郷　山内　碧

九十四歳新茶を買ひに自転車漕ぐ　石橋幾代

洗ひ立ての網戸の風を入れにけり　森田明成

通るたび仏間の桃を子が触る　小林朱夏

早苗田を課外授業の列通る　横田敬子

体育館の裏は密かや花は葉に　曽根富久恵

蛇苺責めてくれれば楽なのに　仲里奈央

自転車の籠の筍小躍りす　大西乃子

捕虫網に穴のあきたる子の家路　林　徹也

PDF= 俳誌の salon

ビヤ樽に小さな蛇口若葉風　天谷翔ヱ

どつこいと老いを拂ひて春を待つ　田坂能雄

血の薄くなりたる心地洗鯉　西住三恵工

寝かされし齢不詳の竹婦人　松田明工

人通る度に驚く縞蜥蜴　秋千晴

金銀の鈴打ち鳴らし祭馬　あさなが捷

村祭轍残して果てにけり　宮井知英

春の雨役場市民課泥まみれ　古賀眞理

恋の猫背のびしてまた戦ひへ　田代貞香

桜餅たひらに持ちて叔父来たる　三井所美智子

亡き人に捧ぐる高さ桐の花　山田正子

家が飛び代田が飛んでゆく車窓　石川子熊

会食は紫陽花見ゆる離れの間　遠山のり子

PDF= 俳誌の salon

朝がすみ小枝くはふる番鳩　宮川正彦

忘れし頃忘れし場所にすみれ草　本多トミ

猫と寝て猫になりゆく梅雨半ば　青木朋子

四捨五入して恐ろしきこと夏大根　田中とし江

金魚玉ビー玉だけが残りけり　田邊豊子

紐しかと確かめて買ふ麦稈帽　片田幸子

晩学の道ゆるやかや夏に入る　日高孝

カーテンに木の葉の透ける朝寝かな　佐藤和弘

螢を籠に入れたるうしろめたさ　石井みゆき

中学を太鼓一筋卒業す　倉智万数雄

あやせば手うちて笑ふ子桜の実　えとう樹里

戒名で呼ばるる母や春深し　岩下きぬ代

打水の落柿舎に聞く鐘の音　早田保子

PDF= 俳誌の salon

空作品評

柴田佐知子

父ははのなき世は長し金玉糖　　高倉　和子

母上、父上と続けて亡くされた和子さんの作品。この世の大方を失ったかのようなしみじみとした寂寥感にうたれる。この情感を伝える要は〈長し〉…この表現に全てがかかっている。また繊細な感覚は季語の選択にも顕著だ。下五にさりげなく置かれた涼やかな〈金玉糖〉が寂寥感を静かに受け止めている。

ゆく先はゆき着くところ雛送る　　角野　良生
家が飛び代田が飛んでゆく車窓　　石川　子熊

一句目、小さな雛が人の穢れを負って流れてゆく。〈ゆく先はゆき着くところ〉…単純にして流し雛の真の姿がとらえられている。人の一生を重ねて読ませる奥行きがある作品。

二句目。〈跳び〉〈飛んで行く〉という畳みかける表現によって、句にリアルなスピード感が生まれている。

俳句という短い定型詩では、リフレインの使用は注意が必要だが、この二句は実にうまく使いこなされている。

海水を染めて渦巻く桜鯛　　永淵　惠子

「魚島」の景であろうか。八十八夜前後に、外海から産卵のため鯛や鯖などが内海に入り込み、魚群が海を盛り上げ島のようになってひしめくという。〈海水を染めて〉の把握が見事だ。

きらきらと鯉のぼり手に帰る児ら　河原　敬子
早苗田を課外授業の列通る　　横田　敬子

一句目、子供の日の前に幼稚園で子供たちが鯉幟を作ったのであろう。一人一人が自作の鯉幟を掲げるように持って帰ってゆく。鯉幟も子供も、そして端午の節句の頃の木々や空など、すべてが〈きらきら〉と映像化されるいきいきとした作品である。

二句目も子供たちが詠まれている。〈早苗田〉は田囲の風景が映っていることであろう課外授業の子供たちも映っているかもしれない。苗はすくすくと育ち青田へと変わってゆく。

二句とも光景が無理のない言葉の選択と調べによってすっきりと仕立てられている。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon

空集

柴田佐知子選

麩や笑ひすぎたるあとの顔　福岡　高倉和子
夏草の匂ひに少したぢろげる
山裾を這ふ雨雲や濁り鮒
水底を知らぬままなり浮人形
灯を消して別の顔持つ金魚かな
父ははのなき世は長し金玉糖
湖にしみひとつなき帰省かな　粕屋　吉田　葎
夏帽子ぬいでよく食べよく笑ふ
花道の黒子平らに梅雨真中
夏期講習だまつて弁当食べてをり
祭まで三日の鉦は火の如く
売り切って火仕舞をする夜店かな

烏賊釣漁夫昼をだらだらしてゐたり　長崎　千波　悠
桟橋の爪先あがり大南風
膝を越す踏絵の址の夏あざみ
ひとり寝の深海に似て遠河鹿
飛び込まむばかり鯛網ひき揚ぐる
千切れ飛ぶ鯛網漁の男唄
海原の晴れ手のひらのてんと虫　北九州　深川　淑枝
鰺釣に当り遠のく昼の月
逃ぐることはや身につきし蜥蜴の子
巣作りの烏藁屋根の藁盗む
ほととぎすへ顔の幅ほど窓開ける
灼け砂を踏む信心の裸足かな
猪鍋ややれ灰汁をとれ味噌を足せ　福岡　角野良生
寄るとなく離るるとなく残る鴨
仮の家のいつか終の家蕗の薹
ゆく先はゆき着くところ雛送る

PDF= 俳誌の salon